

# あるむぜお

府中市郷土の森だより

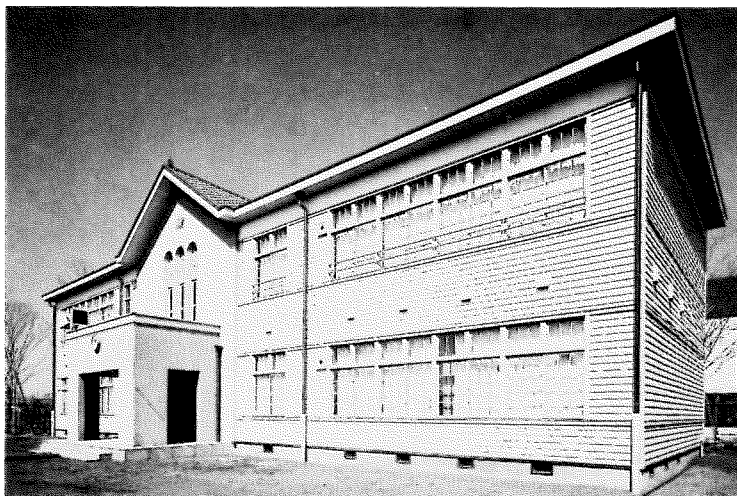
No. 5

*al museo*



古代の瓦(八葉単弁蓮華文軒丸瓦)

## 旧府中町立府中尋常高等小学校



旧所在地 府中市寿町  
解体 昭和54年8月  
復原 昭和57年3月  
構造 木造2階建 瓦葺き屋根  
延床面積 635.51㎡  
設計監理 (有)新建築研究所  
施工 東栄建設(株)他

きさも4間×5間(7.2×9メートル)に統一されたり、校舎の端部分には、手工室、音楽室等の特別教室が設置されました。階段についても注意が向けられるようになり、勾配もややゆるやかになり、踊

郷土の森の発券所をくぐると、右手に蔵を模した近代的な博物館の建物、左手に木造2階建ての校舎が眼にはいります。

この校舎は、昭和10年9月に開校した小学校の一部を復元したものです。当時の校名は、府中町立府中尋常高等小学校と呼ばれ、昭和54年に解体するまでに多くの卒業生を輩出してきました。

当時の建物の規模はコの字型で中央にバルコニー付き玄関と、一般教室35室、準備室付き特別教室4室(音楽室、郷土室、講堂等)や来賓、応接室を備えた学校として、当時の読売新聞に「北多摩摩随一」であると紹介されました。

日本における小学校建築の画一化は、明治33年の「小学校令」の改正、同44年の再度の改正による義務教育制度の確立、授業料の免除等による就学率の上昇のため学校や教室が不足、児童の衛生面などを理由に昭和11年頃までに進みました。

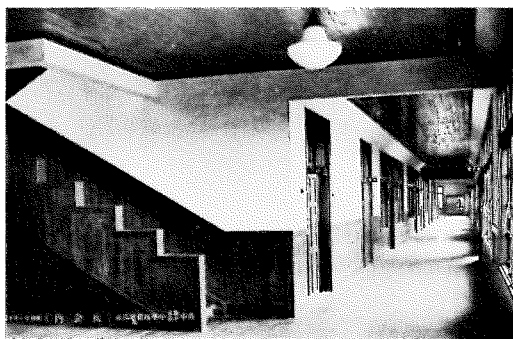
その主なものは、この復原校舎の解体前にも見られたようなコの字型や、逆し字型の校舎が多く建てられ、廊下は北側に、教室は南側に全国一律に配置されました。また、普通教室の大

り場を設けて折り返し階段が設けられました。

これら、手工室、郷土室等の特別教室の設置の背景には、児童中心の自由創造教育を尊重した大正期の新しい教育論がありました。

体操教育もこの時期から、従来の垂鈴等を用いた軽体操がスウェーデン式体操に変わり、広い運動場が必要になると、講堂は、集会室専用として使用されるようになりました。

この復原した校舎はこうした当時の教育の流れを、私たちに教えてくれるもので、貴重な文化財としてみることができます。(1)



落成時の校舎内

## 民具とその収集

博物館活動の4つの柱は、1)資料収集、2)資料整理・保管、3)調査研究、4)教育普及であること、また実際にその活動を担うのが学芸員であることは、すでに前号までご紹介しました。

博物館学芸員は、それぞれの博物館で専門分野の仕事に携わっています。郷土の森の博物館には、「歴史」「民俗」「考古」「自然」「教育普及」担当の学芸員がいます。

今回から民俗担当の学芸員の具体的な仕事、また民俗資料についてご紹介します。

### ＝民具とは＝

よく「民具」という言葉を耳にします。民具という呼び方をはじめて使ったのは、故茨沢敬三氏です。昭和の初め頃、氏の主宰するアチック・ミュージアム(現日本常民文化研究所)に生活用具を集め始めた頃のことです。それでは一体民具とは何でしょうか。この概念については諸説ありますが、ひとまず人びとがこれまでに使ってきた生活用具、ないしは人びとのなかに伝えられてきた生活用具と規定することができるでしょう。『文化財保護法』によれば、民俗文化財には風俗慣習といった無形のもの、物件である有形のものがありますが、民具とは、ここでいう有形民俗文化財とほぼ同じ内容を持つといっているかと思います。いずれにせよ民具とは、国民文化または民族文化の本質と変遷の解明に欠くことのできない資料といえるでしょう。

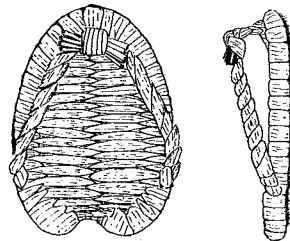
### ＝民俗資料の収集＝

難しいことはこれまでにして、民俗担当の学芸員は民具をはじめ民俗資料を収集します。ただなんでもかんでも集めるわけではありません。それぞれの博物館の活動方針に基づき、資料の収集を行っているのです。

さて昨年4月に郷土の森がオープンして、これまでに50件もの資料受入が相次ぎました。そ

れも1点や2点ではなく「物置のなかすべて持ってっていいよ」というケースもあります。あまりの点数に当の学芸員は悲鳴をあげましたが、これはうれしい悲鳴です。次第に民具が実生活には無用の長物となっていく今日、収集方針にのっとなって、今のうちに手に入るものはできるだけ多く収集しておく必要があります。同じものがあるからといっても、その1点にそれぞれの顔があるのです。民俗学者で民具学の先学でもある故宮本常一氏は「民具を収集するなら最低2万点は集めよ」と主張されていました。そこには民具収集の重要性もさることながら、2万点というとりあえずの目標を達成するならば、はじめてそこに何かを語れる、ということなのでしょう。ちなみに郷土の森の収蔵点数は約1万点、やっと折り返し地点です。このように資料の収集は、今日の博物館に課せられた重大な使命のひとつといえます。

これらの提供者のなかには、一度郷土の森にきて「あれ、こんなものならうちにもある。こんなものでよければ」という方も、ずいぶん含まれていました。“こんなもの”が、実は貴重な博物館資料となる場合があるのです。連綿と続く人類の歴史のなかで、その基調をなすものは人びとの生活であり、日々繰り返され、伝承されてきた生活の歴史を無視しては、本当の歴史とはいえないのではないのでしょうか。人びとの生活の歴史が、ひとつの民具に結実しているともいえるのです。



あし 中  
足 半

## 定光寺経塚とその周辺

深澤靖幸

## 1

江戸時代の地誌や紀行文には、地中から出土した遺物や寺院・神社に伝わる工芸品などについても丹念に調べて記録されています。

文政3年(1820)に植田孟縉によって著された『武蔵名勝図会』には、多摩郡府中領の常光寺で出土した銅筒の存在とその銘を記録しています。同書によればその銘は、

敬白僧智賢南閩浮提日本国武蔵国多波郡定光寺矣、大施主上生成恒、少施主藤原氏、工藤原道、仁安二年歳次丁亥二月廿一日

庚寅（マ）とあり、この銅筒が埋納された紙本経の容器（経筒）であり、ここに経塚が存在したことを教えてください。

経塚とは、仏教経典を書写し、地中に埋納することによってこれを未来永劫に保存する目的で営まれた遺跡です。その発生は平安時代、10世紀末頃のことと、この背景には釈迦入滅後仏法の世が終わると末法の世に入るという考え（末法思想）がありました。しかし、鎌倉末期以降には、書写した経典を埋納するという基本的要素は変わりませんが、本来の目的から逸脱し、現世利益などの祈願を目的としたものへと変化していきます。

## 2

さて、『武蔵名勝図会』によって、その存在を知ることのできる経筒は、すでに失われ、その形状や出土した状態について全くわかりません。しかし、記録された銘から、この経塚は仁安2年(1167)2月21日に定光寺の僧智賢が勧進し、上生成恒と藤原氏が施主となって造立されたものであり、経筒の製作者は藤原守道という人物であるということがわかります。

ここに記された人物のうち僧智賢と上生成恒については、他に史料が無くどんな人物であったのか全く知ることができません。しかし、この経筒の作者である藤原守道は、現存する次の

3つの銅製経筒にも作者としてその名をみることができます。

- 1) 埼玉県比企郡嵐山町平沢寺経塚出土品  
「久安四年」(1148)「藤原守道」銘  
鋳銅製 平沢寺所蔵
- 2) 日野市百草松蓮寺経塚出土品  
「長寛元年」(1163)「工匠藤原守道」銘  
銅打物製 文化庁所蔵
- 3) 伝大田区池上本門寺境内出土品  
「長寛三年」(1165)「工藤原守道」銘  
銅打物製 東京国立博物館所蔵

全国に経筒の遺品は数多く存在しますが、同一人物の手になる複数の作品を知ることができる例は大変珍しいことです。古代から中世への転換期のなかで活躍した藤原守道が、どんな組織のもとに置かれていたのかわかりません。しかし、これら4つの経筒がいずれも武蔵国内から出土していることから、彼は、12世紀中葉に武蔵国で活躍した工人であったと考えてよいでしょう。

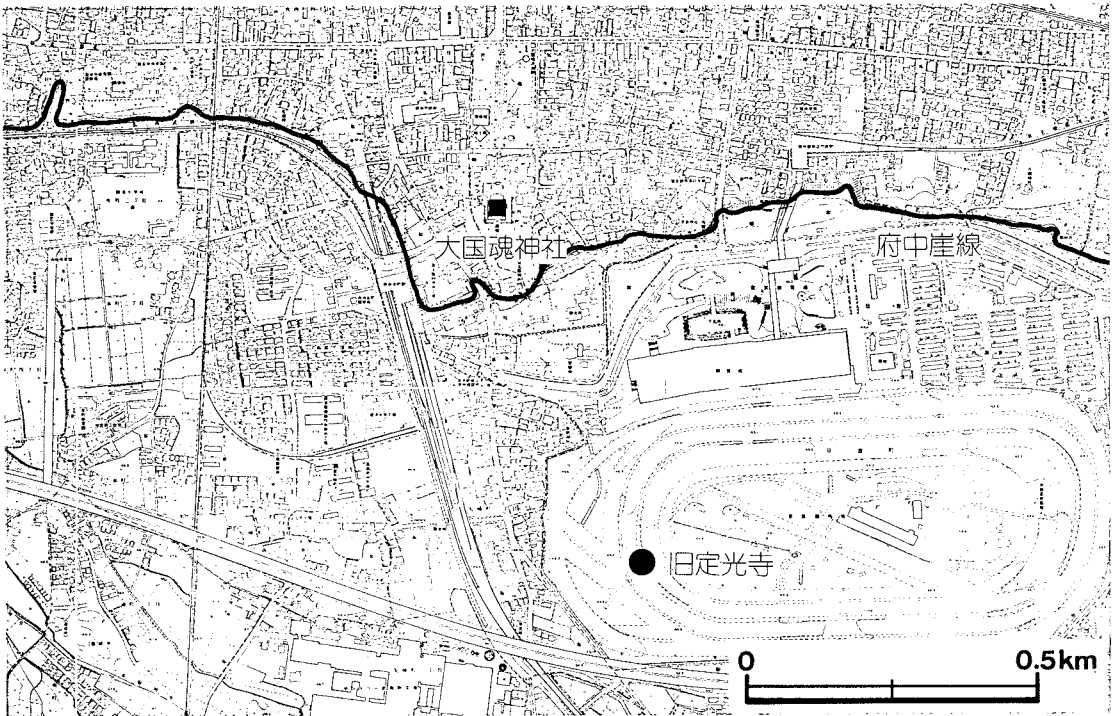
## 3

ところで、常光寺は現在矢崎町1丁目にあります。しかし、これは昭和5年に東京競馬場建設のために移ったものです。もともと常光寺は現在の競馬場の西端にありました。したがって、経筒もこの付近から出土したものでしょう。銘には、「定光寺」とありますから、常光寺は古くは定光寺といい、遅くとも平安時代末期には存在していた寺院であることがわかります。

はたして、この定



松蓮寺出土の経筒



4

光寺はどんな寺院であったのでしょうか。この定光寺に関する資料がもう一つあります。競馬場の建設時に旧定光寺の裏山から骨壺・甕棺4個が出土したと伝えられているのです。この裏山がいったいどこを指すのか、また、どんな状態で出土したのかはわかりませんが、現在そのうちの2個体を郷土の森で保管しています。この2個体はいずれも愛知県常滑窯でつくられたもので、一つは中型の壺、もう一つは大型の甕です。中型の壺は常滑窯の製品のうち古い特徴をもつもので、12世紀中頃に、大型の甕は13世紀後半に生産されたものと考えられます。今は2つともきれいに洗われていて、人骨は残っていませんが、中型壺は火葬骨を納めた骨蔵器として、大型甕は甕棺として使われたでしょう。今は行方不明となっている2個体も、同様の骨蔵器ないし甕棺と考えられます。

これら墳墓の存在は、旧定光寺の地が、平安末期の寺院と経塚だけでなく、中世にも継続する墳墓地をも合わせ持つ遺跡群であったことを示しています。

府中のまちには、国府が置かれ、古代・中世を通じて武蔵国の政治的中心として、人々の集住した地です。発掘調査によって、8～10世紀代には、大国魂神社の東側一帯がその中枢部(国衙)で、府中産線上に東西に長い集落を形成していたことがわかりつつあります。しかし、古代末期から中世にいたる時期の武蔵国府の様相はまだほとんどわかっていません。定光寺は、大国魂神社の南方650m、府中産線下に位置します。この時期の国府が前代の様相を踏襲したものであるとすれば、定光寺は、国府中枢の南方にあたり、国府集落の外縁部に位置することになります。したがって、定光寺を中心とする遺跡群は武蔵国府と密接な関係を持ち、その背景には国府の有力者層の存在を考えるのが自然でしょう。

他に文献資料や古瓦の出土もなく、競馬場の下となってしまった今、発掘調査によって新たに資料を加えることも不可能といえます。しかし、定光寺と経塚、墳墓は、この時期の武蔵国府に関連する数少ない遺跡であり、国府解明の貴重な資料なのです。

註1 稲村坦元編『武蔵史料銘記集』では、『多摩名所図絵』所収のものを引用しています。これによれば、

敬白南閻浮提日本国武蔵州多波郡定光寺僧智賢

大施主 壬生成桓

小施主 藤原氏

大工 藤原守道

仁安二年歳次丁亥二月廿一日 庚寅

とあり、『武蔵名勝図絵』の記載と若干異なります。これに従えば、大施主は「壬生成桓」

であり、承和12年(845)に武蔵国分寺七重塔を再興した前男叡郡大領従八位上壬生吉志福正に連なる人物とも考えられます。また、藤原守道の肩書きも「大工」とあり、鑄物・打物師として社会的地位をもつ人物であったと推測できます。

註2 郷土の森では、他に出土地不明の常滑窯産の甕を2個体保管しています。この2個体が旧常光寺出土のものとも考えられますが、確証はありません。

## —最近の発掘調査から—

現代社会において鍵は欠くことのできない生活用具ですが、奈良・平安時代においては、それほど普及しているものではありませんでした。

古代における鍵=錠前は、おもに米などを収めておく倉庫の扉や、貴重品が入った小箱や厨子など限られた用途に用いられていたようです。

錠前の種類も、現代あるシリンダー錠ではなく、図で示したような“えび錠”と呼ばれるものでした。仕組みは本体が2つに分離するような構造で、一つはU字形をする金属棒の一端に箱が取り付くもので、もう一つがL字に折れ曲がった金具で、短い方には丸い穴が開いており、長い方には矢印のように左右に開く羽が付いています。鍵を閉じるときは、L字形の金具の丸い穴に、U字形の金具の一端を差し込み、L字形の金具の長い方を、U字形の金具の箱にあいた穴に入れます。奥まで入れますと、左右の羽が箱の中でひらいて戻らなくなり、鍵がかかります。一方鍵を開けるときは、先端が折れ曲が

った鍵を、U字形をした金具の箱の部分にある鍵穴にいれ、鍵先の曲がった先にある穴で、左右に開いた羽を絞っていけば、L字形の金具が箱からはずれるわけです。

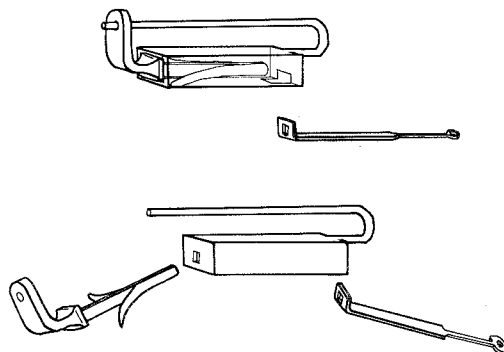
もちろん、古代においては畑に行くときに堅穴住居址の扉に鍵をかけて行くことなど考えにくいことから、一般の農村集落では錠前の出土はほとんど知られていないわけです。武蔵国府においても、これまで出土していなかったのですが、最近「鍵」と「錠前のL字形の金具」が相次いで出土しました。鍵は美好町の「サンケンパレス府中美好町地区」から、L字形の金具は府中町の「府中村越ビル地区」から出土したもので、いずれも、その大きさから小箱などに付けられていた錠前の一部と考えられるものでした。

はたして、鍵を掛けて大切に小箱に収められていたものとは、如何なるものだったのでしょうか。古代における貴重品とは・・・

(美好町・サンケンパレス府中美好町地区 府中町・府中村越ビル地区の調査から 荒井)



出土した鍵と錠前 右は復原図







◀9/23~10/30  
特別展 馬

かつて馬は人々の生活に深くかかわる存在でした。重要な交通手段や戦力として、また信仰や年中行事のなか、馬は人間のもとで活躍してきました。特別展では古墳時代の埴輪や武士の跨がった鞍、馬が登場する錦絵、さらに絵馬やワラ馬、祭の馬装束など多数の資料を全国から出品しました。



◀10/29,30 こめっこクラブ——稲刈り

今年は郷土の森水田元年。6月25日に田植えをして以来、夏の長雨と草取りに悩まされた毎日でした。稲刈りも大幅に遅れて実施。全国的な不作が伝えられるなかで、まずまずの出来かな。メンバーの子どもたちも自分で刈り取った稲を手に思わずニッコリ。それはそうと、日本の農業これからどうなるんでしょうね？

7/26,8/9 おもちゃを作ろう ▶

夏休みの恒例、手作り玩具教室。「とばす」おもちゃ？ でも昔のおもちゃはけっして友だちどうし傷つけあうものではありません。



◀7/28~30,8/23 縄文土器を作ろう！

現代っ子たちの古代人土器土器体験。いくら今年が異常気象とはいえ、8月のたき火はたいへんでした。その甲斐あって縄文土器の野焼きは大成功、一つもわれずにでき上りました。

あれこれ

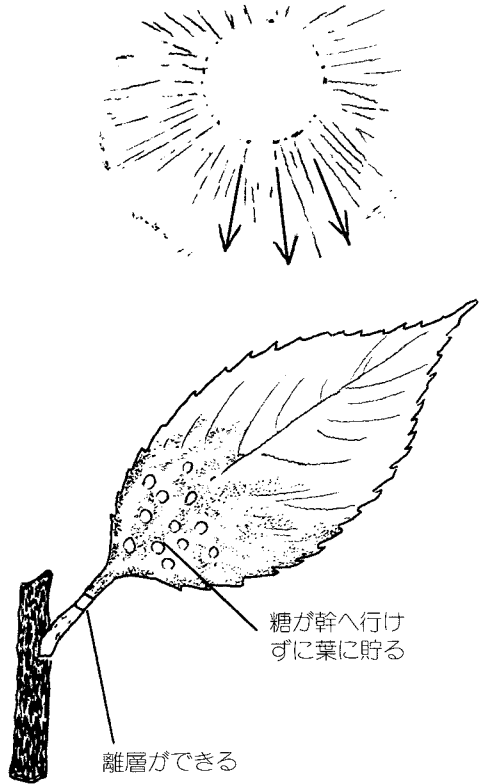
＝紅葉のはなし＝

秋も深まる頃になると、郷土の森園内に生える樹々の葉が紅葉して、色とりどりの姿を見せてくれます。夏の間青々としていた葉はどうしてこのような色変わりを起こすのでしょうか。今回はそのしくみについて少しお話しします。

気温が8～9℃に下がる頃、紅葉は始まりです。紅葉の美しい植物はカエデ科、ウルシ科、ブドウ科、ツツジ科に多く、これらの葉には糖分がよく含まれており、北アメリカのサトウカエデからは砂糖がつくれる程です。ゆえにそのしくみは、葉が老化して葉柄の基部に離層が生じると、光合成でつくられた糖分の幹への輸送路が分断されます。これによって葉に貯蓄された糖分が化学変化し、アントシアンと呼ばれる赤色色素を生じることで葉を赤く染めるといわけです。また県木園のイチヨウなどは葉が黄色くなりますが、カロチノイドと呼ばれる黄色の色素をもとから持ち合わせており、秋になって葉緑素がこわれると、この色素が前面に現われてくるため黄色の葉になるのです。更に雑木林のクヌギ、コナラでは赤、黄のどちらにもならず、細胞が枯れ死ぬことで細胞内の物質が酸化して、葉は茶褐色に変わります。

このように、一口に紅葉と言っても、黄葉、茶褐色葉など、植物の種類によって染め変わる

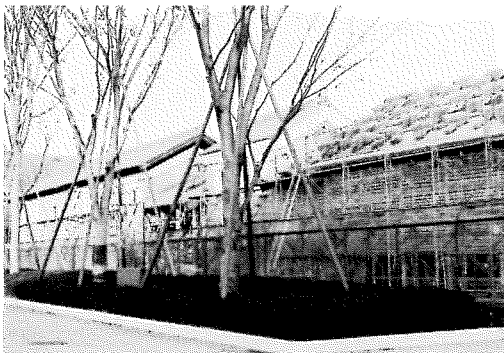
色は異なり、かつ相当の理由のあることがわがかると思います。色の違いがあればこそ秋の趣きをよりいっそう深めることの出来る紅葉は、さながらきびしい冬をむかえる前に植物が演じる束の間のショータイムと言えるでしょう。(N)



インフォメーション

ただ今、建設中！

旧田中家住宅



旧田中家住宅の建設が、来年3月竣工予定で進んでいます。この住宅は、甲州街道に沿った町屋のひとつとして復原されます。間口が狭く奥行きのあるマチバの特徴をもち、土蔵が4つもある大きな商家で、竣工後は多方面にわたり活用されます。

あるむぜお 第5号  
al museo イタリア語  
“博物館で”“博物館にて”の意  
発行年月日 昭和63年12月20日  
発行 府中市郷土の森  
〒183 東京都府中市南町6-32  
☎0423-68-7921